



Title	今井館長と上松老人のこと
Author(s)	山村, 太郎
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 109-113
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

のであった。所謂三孝論中の大孝の實踐主義者でもあったのだらう。後に懷德堂で諸先生と對談して居られる時に、吉田先生の口から此の「ハッハッ」の出るのを見かけたが、子供のうちから身についた言葉であるだけに、尊敬と温情をコンバインした誠に美しい感じがした。固くなつた時に出る私のハッハッとは全く性質の違ふものである。

やがて弟の土岐郎さんも獸醫となつて天下茶屋の久世牧場に勤務せられるし、妹さんも縁付かれたので、先生もお松夫人を迎えられたが、當時としては餘程晩婚であつたように思ふ。そして池田市での新婚生活が始り、新聞社も退いて懷德堂の專屬勤務となられ、文務省の奨學

今井館長と上松老人のこと

藤塚兄 本年は懷德堂重建五十周年に當りますとか、斯學隆盛のため御同慶のいたりです。ついでに御話の故今井貫一氏のことですが、小生これと思ひ出話も實はもちあわせていないのですが、お話のように今井氏と同年輩の方達もその多くは故人となられた現在、手近で多

今井館長と上松老人のこと

資金を得て東洋哲學の研究に北京へ赴かれたのである。出發の準備中、幾度も、「他校大學の先生の中には留學生成金になつて歸られる人も澤山あるのだから、お金を残して持ち歸りなさい」と一角の苦勞人振つて諫言しておいたはずであつたが、借金を残して漢書を澤山買つて來られた。そして曰く、「四庫全書を全部買へなかつた！惜しい事をした」である。金銭勘定など頭になく、ケロリとしたものである。こんな所は西村碩園先生とそっくりである。恩師の感化と云ふものであらうか。西村先生の御内室さんが聞かれたら定めし苦笑せられた事であらう。

山村 太郎

少とも縁故の者といえばあなた位だとのこと、——こう聞きますと小生も六十を過ぎていますから——御指名を頂いたので、不適任者ですが、やむなくこの手紙をもつて御答にかえ、その責を塞ぎたいと思ひます。

今井氏は御承知のように大阪府立圖書館の初代館長で

した。略歴を示しておきましょう。滋賀縣人、東大文科史學科卒、滋賀縣立第一尋常中學校教諭、愛知縣第三中學校長を経て、明治三十六年四月本館長就任、同四十五年海外出張、圖書館及博物館等教育施設研究、昭和八年九月依頼免官。（『大阪府立圖書館五十年史略』による）

昭和四年のことです。小生が縁あって職をこの館に奉じることとなってからで、今井氏とは事務上の交渉が始ったわけです。縁あってというのは、小生は中學時代（當時の市岡中學）から悪友とよく遊びに來たものです。勿論館長など知る譯はありませんが、何よりこの大量の本（實は閲覧カードですが）に壓倒されました。讀めもしないカードの本を注文しても、ともかくも現物が見られました。和本というものを手に持った始めでしょうか。大學で國文科を選んだのも、卒業後ここに就職したのも、こんなところに糸がひかれていたかも知れません。

餘談になりましたが、就職當時古書に精通している人が今井氏の外に二人いられました。司書部長の長田富作、貴重圖書や古書係の上松寅三老人です。こうした三人の圖書館人であり古書愛好者によって、圖書館業務はもとより、古書、古文書などについての指導や書誌學的研究の第一歩を教えられたものです。

今井氏は概して謹嚴かつ温厚な事務家でした。時にはこれが唯一の御趣味なんでしょうか、事務終了後に居残って館友らと碁を圍まれることがあります。そんな折時にはユーモアも出る温和な老人という感じを與えられたものです。昭和八年九月、館長の職を辭されて其後住友本社の家史編纂に従事されました。住友本社は中之島の對岸で近いものですから、時折りはこの舊巢に立ち寄り古書に關する話でした。退館される少し前それは昭和五年だったと思います。氏の在職二十五年記念會が出來まして、その記念出版に『石山本願寺日記』上下二冊が、上松老人の手によって編纂校訂されました。氏の斯界における業績をたたえる一助として獻呈したことがあります。毎日のようにこの校正に朱筆を入れていられた上松老人の姿が今も眼に浮びます。たしか老人も懷德堂の幹事だったので、時には小生をつかまえて、懷德堂の寄托圖書を取り出しいろいろと學風の話などを伺った記憶もあります。懷德堂諸先賢の藏書印が保管されていたのを拜見したのもこんな時であったかと思えます。後年のことですが——今井氏も上松老人も他界されてからの事ですが、小生が貴重圖書の保管係をしていた頃のことです。ある宿直の夜ひそかに『懷德堂印存』に習って

これらの印を畫仙紙に一つ一つそれは非常な感激をもつて捺印して、一冊手作りしたことがあります。(この事は本誌の二十四號にも一寸觸れています)又話が逸れまして失禮。

これは最近仄聞いたことですが、大正三年の頃「現代著述家の手稿と寫眞」展が催されたことがあったさうです。この時、今井館長が夏目漱石に出品を依頼されたところ、「自分のは出品するほどの價値がない」との斷り狀が來たさうで、その手紙が最近書庫から發見されたさうです。(高田克太郎氏の報告)當時としては——今からもう五十年以上にもなります——大阪でのこの企畫は驚嘆に値すると思います。が然し『大阪府立圖書館五十年史略』(昭和二十八年十一月刊)の圖書展觀の項にはこの記事がありませんから、或は今井氏の計畫だおれとなつたのかも知れませんが。關西を中心すれば或は成立したかも知れませんが、今もさうですが當時は勿論東京中心です。年譜を見ますと大正三年には作品『心』を脱稿した年で、五年には死去していますから晩年の一番油のりきつた時です。當時の流行作家の一人だったその漱石が拒絶したのです。大阪という土地柄が文藝の育たないところなんですね。ともあれ氏が大阪文化の一助ともしようというその努力が、ここにみられると思います。

今井館長と上松老人のこと

これは小生の臆測ですが事實挫折したのでしたら今井氏のために残念なことでした。このような努力による近代的な企畫もあつたようですが、氏としてはやはり古典派の人なんです。昭和六年、今井氏の發案でしよう。論語の展觀が開催されたことがあります。全國に散在する論語の善本古版本を一堂に集めようとしたもので、これは成功でした。本格的な善本展だつたと思います。これが機縁となつて、長田司書部長の『正平版論語の研究』が刊行されています。

再び上松老のことになりますが、これは今井館長が退職されて随分後のことです。論語に引き續いて孝經善本展、眞福寺秘藏本展など漢籍ものが當分續きました。勿論これらも學界のために結構な企畫で、いづれも相當の成果を擧げたことでした。漢籍に弱過ぎる小生には齒が立ちません。そこで眼をつけたのが淨瑠璃本で折角六〇〇以上も架藏している丸本の書誌學的な調査を初めては何うかと上松老と話合つたことから、未架藏の丸本購入、これは何しろ近松其他普通本は大部分架藏している上にといふのですから、稀本か、獻上本か、しかも出来るだけ善本という點で、限られた古書購入費では大變でした。上松老は架藏本に捺印された舊藏者を調査したり、小生は主として版式、奥付などを詳細に全部にわた

りノートしましたが、これを歸納的にまとめる爲には、多過ぎて手がつかないのです。何分本務以外のことで毎日居残ることも出来ず、最初は努力しましたが、段々と複雑さが面倒となり、宿直の夜だけを當てましたが、とかくするうちに上松老は死去されて調査に一頓挫をきたし、後年には戦時となつていよいよ暢氣な仕事も出来ず、調査は未了に終わりました。上松老の調査の爲のリストは氏の形見にと小生の手元に残っています。戦後三十五、信多純一・森修・祐田善雄・横山正の諸氏の手で『近松淨瑠璃本奥書集成』（大阪府立圖書館）が出来上つていますが、小生や上松老の仕事はいはば個人的な學究的な仕事でなく、目的は館の架蔵本を中心とした調査だったために全部に亘つた點に失敗の原因があり、先鞭をつけながら遂に挫折してしまいました。上松老にはこのような思出も残っています。

最後にやや私事にふれて恐縮ですが、これもいささか今井氏と因縁のからんだことなんです。

「山村君 たしか君は國文出身だったナア」

「ええ怠け者で……」

「専攻は？」

「近世を少し……」

「僕は史學なんで、近世といつても、江戸か上方か？」
「大阪人だから上方文學は理解が早かろう、御先祖の文學だからねと、先生にひやかされて、それで近松や西鶴を手掛ることがいいだろうと勧められました」

「卒論にか」

「それでもかく近松の淨瑠璃ということにしました
が……」

「僕には興味がないが、ここには西鶴だといわれる『好色盛衰記』天下の稀本があるの知ってるかい」

「ここに參つて間もないとき、上松さんからもこの本
のことが話題に出ましたが、それは作者は西鶴かということ
なんで、私は返答が出来ないんです。實は學生の
頃、山口剛教授からこの本のことを伺い、歸省したら一
度は非原本を見て来いと注意されたことがありました。
で歸阪のとき係の人から出して貰つて手にしたのが、大
阪で西鶴？の原本に手を觸れた最初でした」

「住友の寄贈なんだよ、『一代男』も『一代女』も、

浮世草子が相當あるので、一つ暇をみて勉強したまえ、
館員の役徳だよ、大學の圖書館でもこれだけの江戸時代
の原本をもっているところはなないよねえ君」

「丸本があれだけあると實に壯觀ですね」

「近松のは殆ど揃っているのじゃないかね」

「暇をみて一度調査したいと思えますが……」

右は就職後の間もない頃でしたか、或る日、食堂で中食の時にまた今井館長と同席したおり、氏が小生相手に話しかけられた取りとめもない雑談の内容だったことを覚えています。くだらないことを記憶しているのは、一は學生時代山口教授から、大阪出身の者が大阪にいて國文學を専攻しようというのに、お膝元にある原本を知らないとは怠慢だ、一度見るようにと極付けられたことと、今また館長の口からこの本の話が出たことなどで、印象に残っているのです。後年のことですが十五年です、ふと本郷の古本屋で珍しいものを掘り出して、それが一見して、『盛衰記』の改題本だと直観しました。『好色榮花物語』と題する卷二の零本一冊ですが、當時この書名の存在を誰人も知らなかったのです。實に稀本です。（『槻の木』四十八號記載）今井館長から古版本は機のあるごとに手にして眼を肥やすことだと、アドバイス

されていたためで、今井氏を多とする次第です。何うも餘談が多く内容が乏しく御回答に添わないことをお詫びします。

追伸

何しろ舊い話なので書き漏しましたが、今井氏が館長を辞されてから、丁度その頃出来上りました大阪市立美術館が開館しましたので、その方の館長事務取扱？をされましたと思ひます。又、住友本社との関係は或は圖書館長時代からで、美術館當時も御関係があつたのではないかと思ひます。昭和十五年三月膽石病で七十一才で亡くなりました。

上松老人は相等な御年配だったのでだいぶ謹碌しておられ、この方も十五・六年でしようか、現職で亡くなったのです。思い出したままを御報します。兩先生には一方ならぬ御指導に預つたことを偲び、御冥福を祈る次第です。